

福岡市埋蔵文化財調査報告書第261集

# SHIKA RUINS 24th

四箇遺跡群



24次調査の報告

1991

福岡市教育委員会

## 目 次

◇ ごあいさつ	3
◇ はじめに	4
◇ 周辺の遺跡散策	6
◇ 調査地点は何処か?	8
◇ I区の調査と出土品	10
◇ II区 タ	18
◇ III区 タ	22
◇ 彩色された土器と木器	30
◇ おわりに	34
◇ Summary	35

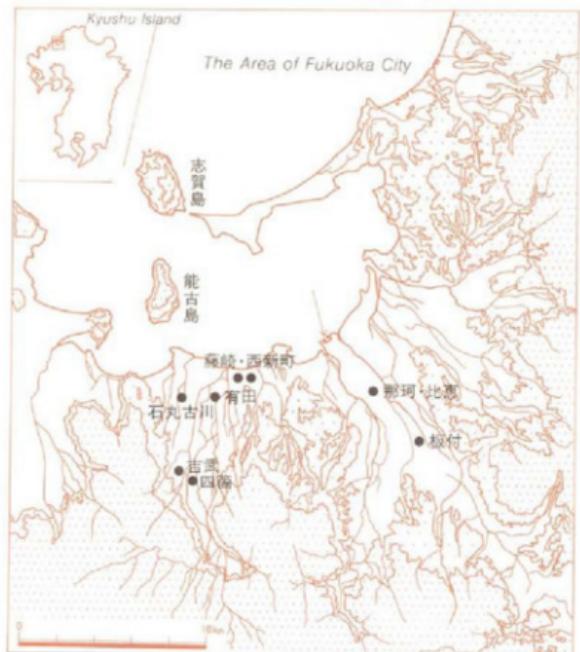
## 凡 例

本書は福岡市教育委員会が1989年度に実施した四箇遺跡群の第24次調査の報告である。

本編は常松幹雄と田中克子（埋蔵文化財課調査員）が協議して編集、作成した。また赤色顔料の分析についての稿を本田光子氏（埋蔵文化財センター調査員）にお願いした。

調査によって得られた資料は、福岡市埋蔵文化財センターに本収蔵の予定となっている。

遺跡略号 SHI-24 調査番号 8952  
調査地 福岡市早良区大字重留1096外  
分布地区番号 084-A-2  
開発面積 8,381m<sup>2</sup> 調査面積 1,405m<sup>2</sup>  
調査期間 1989年10月16日～1990年1月20日



## ごあいさつ

福岡市西部に位置する早良平野は古来より先人の生活の場であったようで、緊急発掘調査によって明らかになった遺跡も、年を追うにつれて数を増してきました。

ここに報告するのは宅地の開発に伴う埋蔵文化財の調査で、とくに道路予定部分について実施したものです。調査によって見つかったのは主に縄文時代から弥生時代にかけての河の一部のよう、出土した遺物には、土器類のほか、石鏃や木製のネズミ返しなどがあります。中には漆を塗った木のお椀や土器もあり、二千年以上前の人々の暮らしが断片的ですが見えてくるように思います。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたって御協力いただいた國土産業株式会社ならびに関係者の皆様に心より御礼を申しあげます。

1991年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

## はじめに

### 発掘調査に至るまで

申請地は、1984年度当時、市住宅供給公社によって開発計画がすすめられていた。その頃まで周知の遺跡となっていたが、開発予定面積が、約 1.8ha と広大なため試し掘りを行なった。試掘調査の結果、中世以降の水田と河川が確認され、杭列の残る河川と水田面が調査の対象部分ということになった。

その後、申請地の南側は、重留老人福祉センターとして、市民生局福祉課から事業計画が出された（22次調査）。またそこに接する南西部については、市都市整備局の管轄に移り、重留西公園の用地として、利用計画が浮上した（23次調査）。

今回、発掘調査の対象となるのは國土産業株式会社へ売却された用地の中、重留台団地として分譲されることになった8,380m<sup>2</sup>の部分についてである。予定の建物は、木造の一般建築であるため、取付道路として将来市道に移管される箇所を永久構築物とみなして発掘調査を実施することになった。

試掘調査は1984年6月、計6日間で山崎龍雄・田中寿夫が担当した。

四箇遺跡群のこれまでの調査については、福岡市埋蔵文化財報告第199集に一覧表がある。

### 調査の組織と構成

委託者 國土産業株式会社  
東京都中央区筑地2丁目12-10  
代表取締役 江口慶一  
調査の折衝 國土産業株式会社 福岡支店  
支店長 三村淳治  
営業課長 仲好徳  
調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課  
調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝  
埋蔵文化財課第一係長 飛高憲雄  
同第二係長 柳沢一男  
文化財主事 横山邦繼  
事前審査担当 佐藤一郎  
調査庶務 安倍徹 中山昭則  
調査担当 常松幹雄  
調査補助 田中克子



発掘現場事務所

## 発掘調査の概要

調査はまず、発掘作業員の募集から始まった。回覧板の案内で集まつた皆さんは主婦の方々が主体で、スコップは初体験という人も多かった。しかし普段から家事労働で鍛えられているせいか、10日もすると土扱いにも慣れ、ぬかるみを縦横にすすむヘルメット姿は、ベテランの皆さんとの区別が難しいまでになっていた。

さて調査は、10月16日から開始し、9頁の図にある1区・2区・3区の順で調査を行った。天候も大幅に崩れることもなく、予定された3か月間で無事現地での調査と記録を終了した。調査終了日は、1990年1月20日である。

調査にあたっては地元町世話人である三苦啄磨氏に連絡調整の労をとっていただいた。そして条件整備では九州八重洲興業株式会社の配慮

をいただいた。また測量成果については大洋測量設計株式会社の協力を得ることができた。

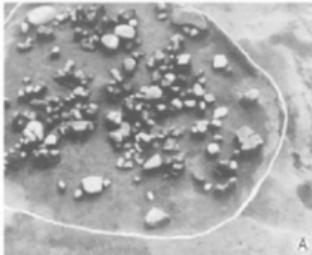
調査参加者 麻生千早都 池田 由美  
入江 利江 大内 文恵  
緒方 美子 海津 宏子  
金子ヨシ子 木村 春子  
熊原 年子 坂原美佐子  
佐藤多美子 惣慶とみ子  
鳥飼久美子 中村キヨミ  
藤田ハツ子 増田 珠子  
家迫 千代 矢富富士子  
三苦 公一 三苦 輝子  
山川美佐子



1号河川作業風景



掘り出された弥生土器



## 周辺の遺跡散策

四箇遺跡群が位置する早良平野は、室見川を中心とする河川によって形成された沖積平野である。これまでの調査をふり返りながら遺跡の幾つかを紹介してみよう。

まず海岸線に近い西新町と藤崎の両遺跡では地下鉄の敷設に伴う調査によって、弥生時代の甕棺墓が総計で130基ほど発掘された。弥生時代から古墳時代にかけての住居址も60軒以上まとまって見つかっている。

そこから3キロほど西南部の有田の低丘陵一帯では、縄文時代から中近世まで連続と営まれてきた集落の様子が160次を超える大小の調査で明らかとなった。

平野の西端にあたる野方中原遺跡は、弥生後期から古墳時代にかけての環濠をもつ集落址で、国指定史跡として整備がすすめられている。

ここ10年来では大規模な圃場整備にかかる調査が非常に大きな割合を占めるようになってきた。そして面積に比例して吉武遺跡群の特定集団墓や拝塚古墳の全容も知られるようになった。

圃場整備事業は、入部・脇山と平野の奥部に

かけて進行中であり、事業終了後は、農地利用規制の解除問題も含めて、文化財行政は早くも再度の対応を迫られることになる。

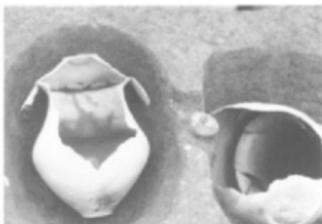
**A 縄文晚期の住居跡 四箇東遺跡、1987年1月～3月、約3,000m<sup>2</sup>の田面で、住居跡5軒、貯蔵穴1基、埋甕1基、土壙1基が見つかった。写真は最も残り具合の良い1号住居跡で中央には口縁と底部を打欠いた鉢が焼いて据えられていた。**

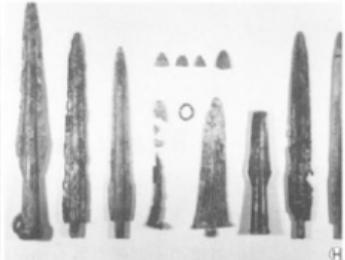
**B 掘り出された河川 圃場整備の工事と併行して見つかった大昔の川のあとである。概要是8頁を参照していただきたい。**

**C 護岸に再利用されていたネズミ返し**  
Bの川岸では、護岸のための杭列などが見つかった。中には写真のように高床倉庫のネズミ返しや建築材を再利用したものがある。リサイクルの元祖。

**D 弥生時代前期の甕棺墓 重留遺跡群、1988年12月～89年3月、弥生時代の遺構は、甕棺墓26基、堅穴住居跡9軒、貯蔵穴16基がある。甕棺は大型の壺を用いたもので、前期から中期初頭までの幅がある。**

**E 横渡古墳（西より）** 1983年～84年3月、直径約30mで方形の造出をもつ古墳は土取りに



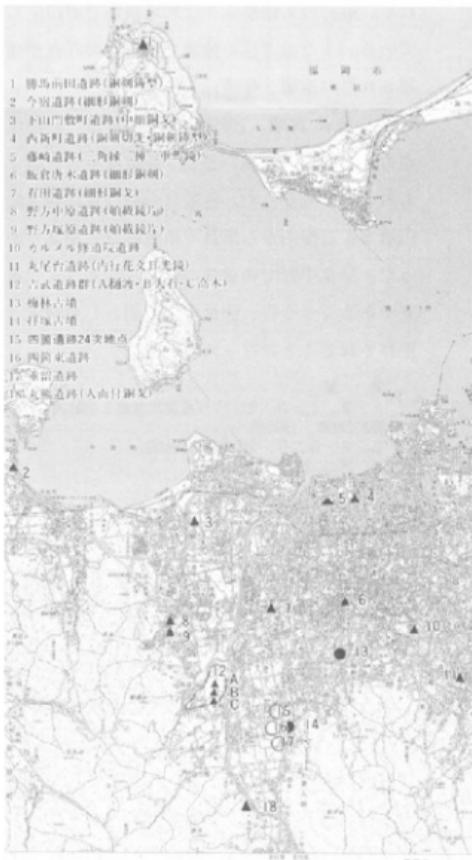


よって主体部は既に破壊されていた。その後墳丘の調査によって、弥生中期後半代の墓地が姿を現した。甕棺墓25基以上、木棺墓・箱式石棺墓各1基は、長径23~24m・墳高2~2.5mの「墳丘墓」に掘り込まれたものであった。重圓文星雲鏡や銅剣・鉄剣、素環頭太刀などの副葬品は、特定集団墓の様相を呈している。

F 吉武高木遺跡（北より） 1984年7月～  
85年3月、木棺墓4基と成人棺7基から、多錫  
細文鏡をはじめ青銅利通話、装身具がまとまっ  
て見つかった。時期は弥生中期初頭、各々の墓  
も大型の棺を使った立派な構造である。墓域は  
その後の範囲確認調査によって、東西方向に長  
い楕円形を呈する1,500m<sup>2</sup>程度の規模と考えられる。

G・H 吉武大石遺跡と主な副葬遺物 1985  
年10月～1986年4月、吉武高木遺跡の北西にあ  
たる大石では、8基の壺棺と2基の木棺墓から  
銅剣・銅矛・銅戈などの副葬品が見つかった。  
時期は高木とはほぼ同時期の弥生前期末から中期  
初頭にかけてであるが、玉などの装身具は極端  
に少ない。

Gの直立の女性は剣、L字型のポーズは戈、両手を頭上に上げた人は矛を表現している。また、かがんだ人は石剣箋の先端を表現している。



### I・J 拝塚古墳と調査風景 1988年4月～

89年3月、この調査によって全長75mの前方後円墳であることが明らかになった。時期は周辺の祭祀遺構の上器群から5世紀はじめと考えられる。盾持の人物埴輪や壺形埴輪などが出土している。また前方部の前面では方墳の存在が確認された（重留2号墳）。

K 梅林古墳 1989年5月～8月、市営住宅の建設の際、小高い丘が5世紀後半の古墳であることが分かった。古墳は全長27mの前方後円墳で、石室内から馬具や須恵器などが見つかった。早良平野での首長の変遷を辿るうえで重要なことから、園地内の公園として復元、保存されることになった。

#### 文 献

A、B、C、D、I、J 『福岡市埋蔵文化財調査報告書』235集、1990年  
E、F、G、H、同143集、1987年  
K、同240集、1991年

## 調査地点は何処か？

### ——周辺の調査との関連について——

24次調査と周辺の調査区を都市計画図（重留・82）のなかで配したのが右の図である。

24次調査区は、住宅や道路によって、大きく2箇所に分れており、調査の進行順にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と呼んでいます。各区で見つかった遺構は、何れも河川の跡であり、人為的な杭列や流れ込んだ土器や木器によって時期を限定できる。

Ⅰ区の南側の23区調査では大流路3本と小流路2本が確認されている。西側のSD-21とSD-26は弥生前期末、東側のSD-23は古墳

時代後期と報告されている。

つぎに22次調査との関連について述べる。22次での大流路は、SD-16（弥生前期末）とSD-10（古墳時代後期）の2条がある。これらの流路は一部重複している。23次調査との関連では、SD-16が西側に大きく迂回して、SD-21や26と合流することが予想される。またSD-10はSD-23とまっすぐに合流するようである。

今回の調査ではⅠ区の1号河川が弥生前期後半で、さきのSD-16やSD-21、SD-26と同一時期であるが、延長とするには少し無理があるようである。

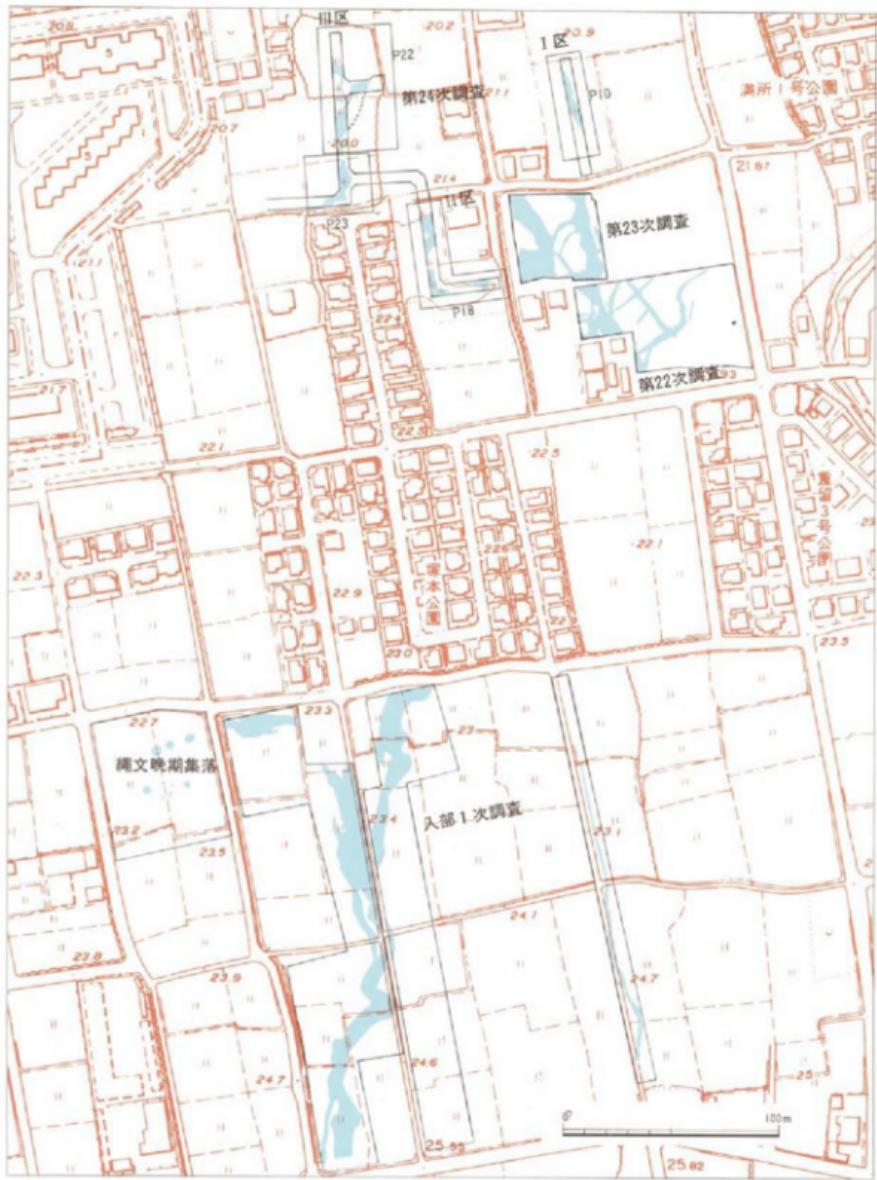
入部の圃場整備に伴う調査では、流路を広範に捉えることができた。しかし、この流路は同時に存したのではないようである。塚本公園寄りでは弥生前期の土器が出土しているが、その東側の護岸では古墳時代の土器がまとまって見つかっている。

縄文晩期の集落寄りでは、弥生後期と古墳時代の河川が重なっている。その南側にかけては、古墳時代の遺物が主体を占めている。

以上述べてきたように、河川の流路は、大変複雑きわまりないといった状況である。しかし、二千年を超えるタイムスケールのなかでは、こうした状態がむしろ自然なのかもしれない。

#### 文 献

22次 『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第196集、1989年  
23次 河 第199集、1989年  
入部Ⅰ 同 第235集、1990年



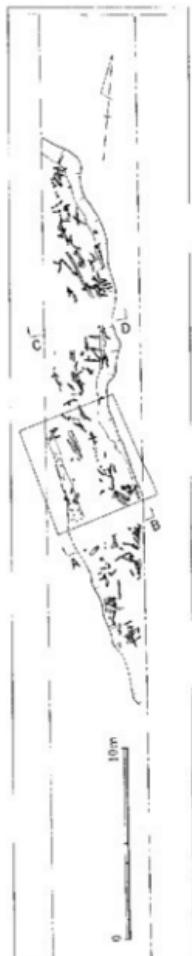
## 24次調査の範囲と周辺調査区の位置 (1/2500)

## I 区の調査と出土品

I 区の調査で明らかとなったのは、ほぼ北西方向に流れる河川跡の一部である。川幅は約4 m、全長30 m 程の調査範囲である。取付道路幅の面積なので周辺調査区との関係を明らかにできないが、土層の堆積状況の比較から南側を上流と判断した。

河川には、枝や加工材が流れ込んでおり、一部は建築材の可能性のあるものもあった。下図に掲げたのは、杭列である。河川の流れに沿って打たれていることから護岸や加工材を浸しておくための溜りを形成していた可能性がある。

混入していた土器は、弥生前期後半を主体としている。また土器の表面はあまり摩耗していないことから集落は川沿いの微高地と推定される。I 区の河川以外の部分では、はっきりした遺構が認められなかったことから、その多くは削平をうけてしまった可能性がつよい。

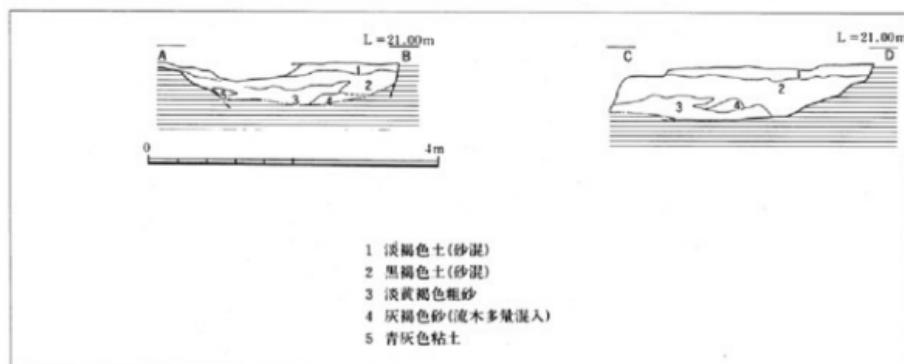


1号河川とその杭列 (1/300, 1/80)

土層から考えられる状況は、土砂流が单一時期にどっと流れ込んだのではないかということである。下図の3とした粗砂層のような粒度の大きなものが下に堆積し、上層は暫くぬかるみのような状態だったのではないだろうか。



1号河川(北より)後方は重留老人福祉センター  
(22次調査地点)



1号河川の土層断面図 (1/80)

## 木 製 品

1は柾目取りの棒の一方には、両側から切込みを入れている。切込みを加えた端部は欠損しているので全形は不明である。用途は不明であるが、祭祀に用いられた可能性がある。全長37.9cmで最大幅は2.5cm、厚さは1.5cm程度である。

2は、三叉鉤の柄を取りける部分の破片である。柾目取りで櫻を用いているようである。又の部分の縦断面はV字型をしており、着柄部の周辺は少し盛り上がっている。拾六町ツイジ遺跡（市調査報告、92集、1983年）などに類品があり、弥生時代前期後半に比定される。

今回木製品の樹種同定は行なっていないが、

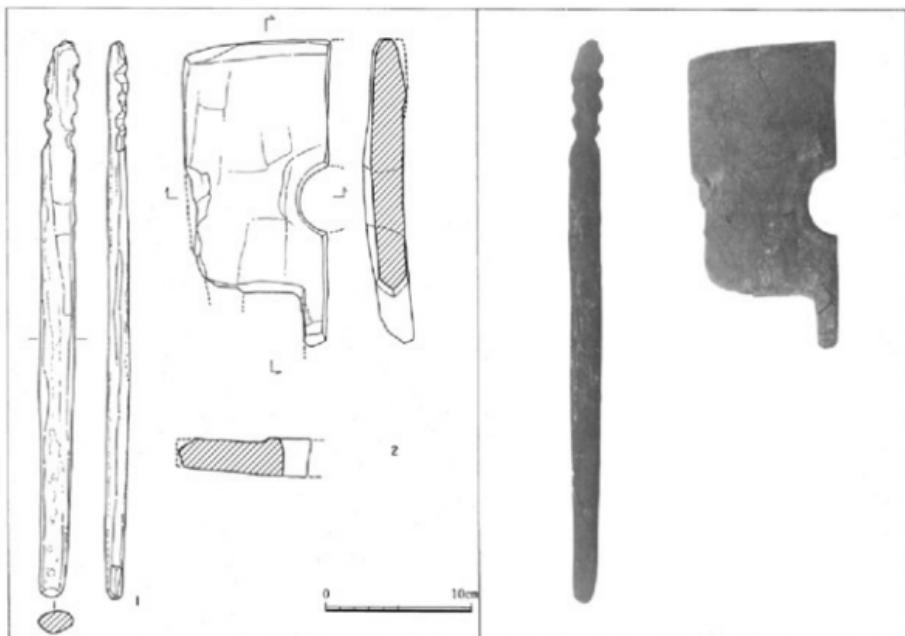
22次と23次調査の成果をまとめてみよう。まず22次調査では、弥生時代に属する318点の中、98%が広葉樹、23次調査では34点の中、96%が広葉樹であり圧倒的な比率を占めている。本地点も同様の結果が予想される。

## 土 器

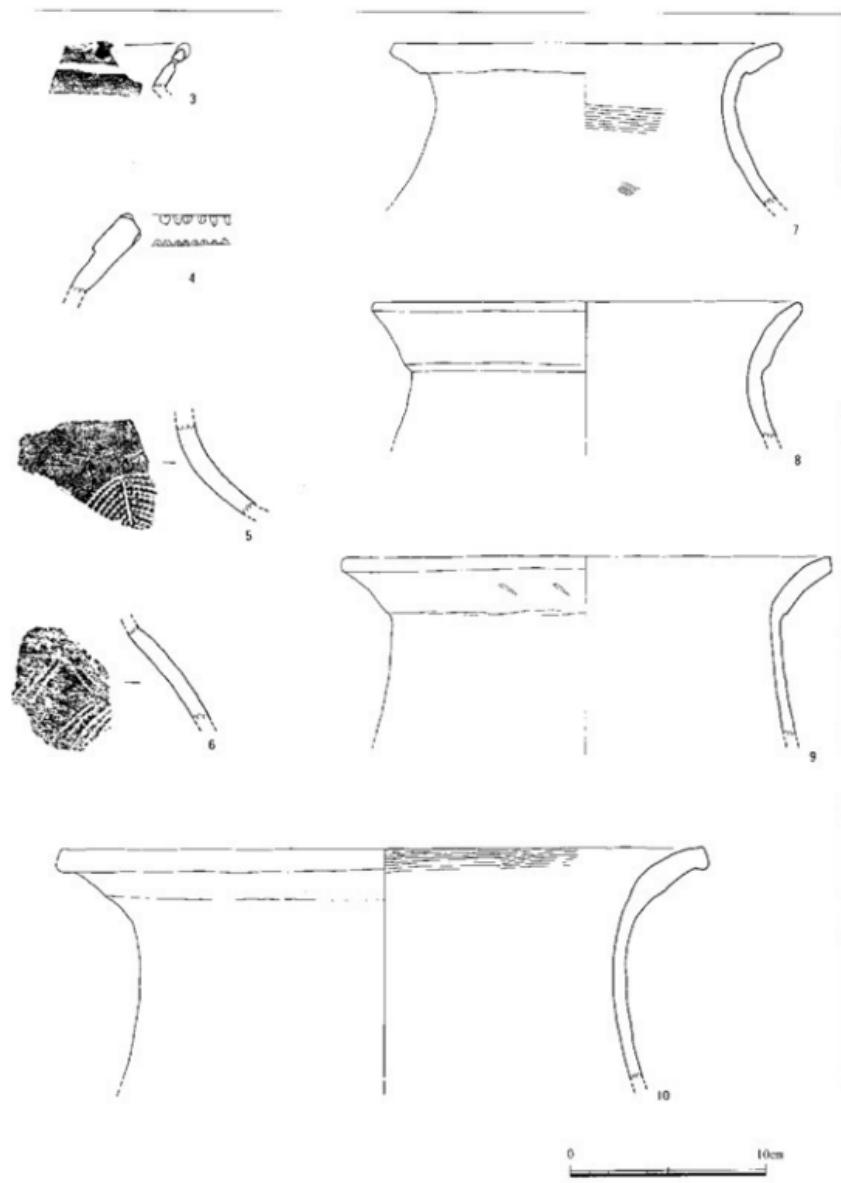
3は縄文晩期の浅鉢の口縁で、黒色の磨研土器である。口縁部は、外面から孔を穿っている。小片で器面はローリングの痕跡がある。

4は壺形土器の口縁部の小片である。口縁端部には、木口による刻目が回る。土器の傾きは推定である。

5は壺形土器の肩部から胴部にかけての破片である。二枚貝の腹縁部により押圧文が施され



1号河川出土の木器 (1/4)



1号河川出土の土器(1) (1/3)

ている。22次調査では類品が出土しており、縦沈線に直交するように横沈線が回り、半円形の文様を上部に、横沈線以下は波状文となる可能性がある。

6も壺形土器の肩から胴部にかけての破片である。文様は、肩部と胴部を画する三条の沈線を回らし、以下に二枚貝の腹縁による弧文を組合せて菱形文を構成している。

7は壺形土器の口頸部の破片で、全周の5分の1程を残している。ハケの端面などによる押圧によって、口縁と頸部を画している。

8は壺の口頸部で全周の10分の1程を残す小片である。口縁と頸部の境目はゆるい段をなしている。器面は全体にローリングをうけ磨滅している。

9は壺の口頸部で全周の6分の1程が残っている。口縁と頸部の境は調整具の押圧によって画され、口縁部にも木口状の調整痕が見られる。

10は壺の口頸部で、口径は33cmに復元される。口縁と頸部の境は、わずかに肥厚している。内外の調整は口縁の内側にハケ目を残すが、全体に丁寧な横ナデが加えられている。全周の4分の1程が残っている。

11は壺形土器の破片で、口縁と胴部の突帯に刻目文を回らしている。刻目は左下りの斜め方向に同時に押圧が施されたと思われる。全周の8分の1以下しか残っていない。胎土中には石英粒が目立っている。

12は壺形土器の破片で、胴部に突帯を回らしている。口縁部は、小さく内側が突出している。全周の7分の1程を残し、器面は少し磨滅している。

13は壺形土器の破片で、断面三角形の粘土帶を付加した口縁をもつ。胴部の突帯はゆるやかで、小さな刻目が密に回る。全周の5分の1程を残し、外面には二次焼成による煤が付着している。

14は如意状口縁を有し、口縁の上端付近に円筒状の原体による刻目を回らしている。小片であるため傾きは参考に止まるが、ハケ目の方向が左下りである点が注意される。

15は、如意状口縁をもつ壺形土器の破片で、口縁の下端に不鮮明な刻目を施している。口縁下の外面に煮こぼれ状の炭化物が付着している。全周の9分の1程を残す。

16は、如意状口縁をもつ壺形土器の破片で、口縁の正面に密な間隔で刻目を回らしている。全周の9分の1程を残し、外面に煤が付着している。暗茶灰色で石英・長石粒が多く含む。

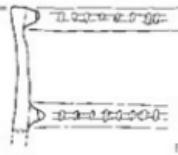
17は、如意状口縁をもつ壺形土器で、口縁の下端と胴部の突帯に刻目文を施している。全周の6分の1程を残している。

18は、如意状口縁の壺形の上器で、口縁部の正面に刻目文を施している。暗茶灰色で、石英粒が目立っている。

19は、如意状口縁の壺形上器で、口縁部下端に刻目を回らす。胴部には一条の沈線が回る。全周の5分の1程を残しており、色は暗茶灰色で石英・長石を混入している。

20は、如意状口縁の壺形土器で、口縁部下端に刻目文を回らしている。全周の9分の1程を残す小片で、胎土には石英・長石が多く目立つ。

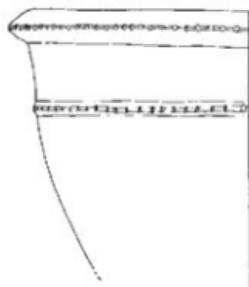
21は如意状口縁の壺形土器で、口縁部下端に刻目、胴部に一条の沈線を回らしている。全周



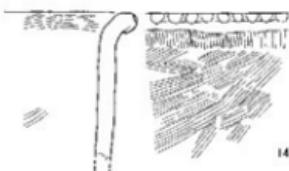
11



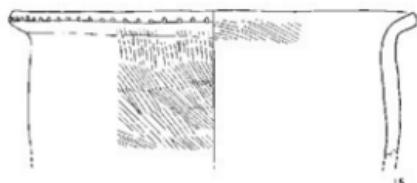
12



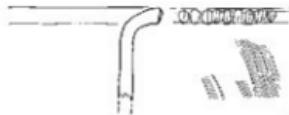
13



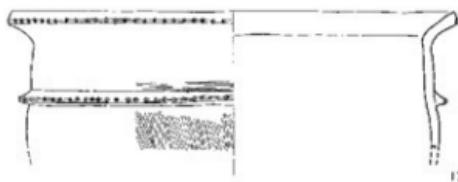
14



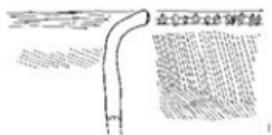
15



16



17



18

1号河川出土の土器(2) (1/3)

7分の1程を残し、口縁部内面に煤が付着している。

22は、如意状口縁の壺形土器で、口縁部下端に刻目を施している。色調は黒褐色で胎土には砂粒が多く含んでいる。

23は、如意状口縁の壺形土器で、全周の6分の1程を残している。器表は茶灰色で、石英粒を多く含んでいる。外面には煤が付着している。

24は、如意状口縁の鉢形土器で、口縁の大部分を欠くが、全形を復元することができる唯一の土器である。口縁の下端には刻目文が回っていた可能性がある。調整は外面が左上り方向、

状の圧痕がある。

27は、壺形土器の底部で、焼成後に孔を穿っている。内面には煤が付着している。外面はナデ調整である。

28は、壺形土器の底部で、内面には煤あるいは炭化物が付着している。粗砂粒を多く含みきめは粗い。外面はハケ目調整である。



I区の包含層では黒曜石の原石と剝片が23点、両側縁に使用痕がある剝片が1点出土している。

土器は、河川の流れ込みであるため、明らか



三又鉢の出土状況



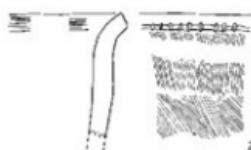
突帯文系土器の出土状況

内面が右上り方向の丁寧なナデで、何れも木口状の調整具を用いている。色は黒褐色で、石英・長石粒を含んでいる。

25は、壺形土器の底部で、内外面にナデ調整を施している。色は淡褐色で、胎土は粗大な砂粒を多く含むが、きめがこまかい。

26は、夜臼式の深鉢の底部と思われる。色は外面は淡褐色で、内面は黒褐色、粗大な石英粒を混入し、きめはかなり粗い。外底部に木の実

に古い様相をもつ3や26などもあるが、他は総じて弥生前期後半の範囲で捉えられるようである。その中でやや新しい型式と思われるものに13の壺があげられる。木製品である三又鉢の型式も他の事例に矛盾しないことから、紀元前2世紀頃に付近の集落で使われていた品々が、洪水の土砂流と一緒に今日まで封じ込められていたとイメージしたい。



20



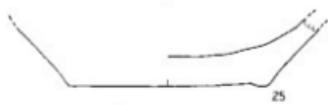
22



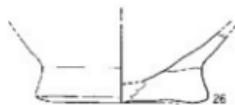
23



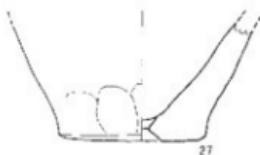
24



25



26



27



28

0 10cm

1号河川出土の土器(3) (1/3)

## II区の調査と出土品

下のL字型の調査区で明らかとなったのは三条の河川の跡である。北側を2号河川、その南側を3号、東側を4号河川として以下に説明する。



2号河川（東より）

■

3号河川は、東岸の一部が確認されただけで、性格がよく掴めなかった。基盤土は2号河川と同様の青灰色粘土層で、河床も粗砂と拳大の礫が混じっている。遺物は少なく、土器は破片が一片のみであった。他にはネズミ返しがあるが、これらについては後にまとめて述べよう。

■

4号河川は、青灰色粘土層を基盤土とし、粗い砂と拳大の礫が混じる層を河床としていたと推定される。周辺の例からすると北への流れと

いったところであろうか。堆積土は粗砂層で、流木や灰色と黒褐色の砂質土が縞状になっている箇所もみられることから、洪水などによって一度に埋まってしまったのではないだろうか。河岸の上面の河床との段差は約40cmである。

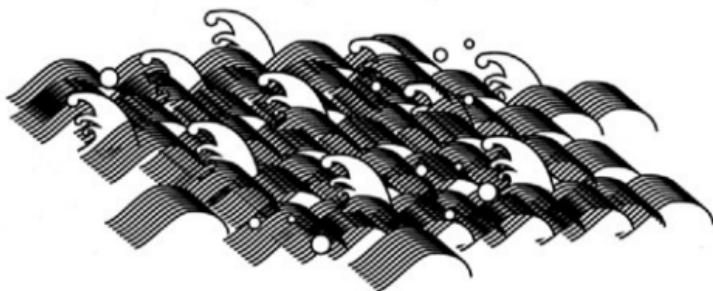
以上II区の河川は、何れも端をかすめた程度で、今一つ性格を明らかにできない。出土遺物も各々ひじょうに少なく、時期の上限を示すものであっても、下限として捉えるのは危険である。



3号河川と出土したネズミ返し



4号河川（東より）



## 木製品

3号河川では中ば河床に埋まり込んだ状態でネズミ返しが出土した(29)。形状は長軸が68cmの隅丸方形で、平面図の上辺は少し腐朽がすんでいる。厚身は、ほぞ穴付近で2.5~3cm、縁辺にかけて薄くなっている。下の断面図のカーブを見てわかるように下が樹皮に近い面である。また、出土時は樹皮面を上にした恰好で、中央のほぞ穴に木質は認められなかったことから、上游から流れ込んできた可能性がある。

さてこのネズミ返しの使用位置については推測の域に止まるのだが、ほぞ穴の一部が樹皮側にかけて若干広がっているので、とりあえず

樹皮側が地面を向いていたとしたい。民俗例をはじめ、様々な御意見を請うところである。

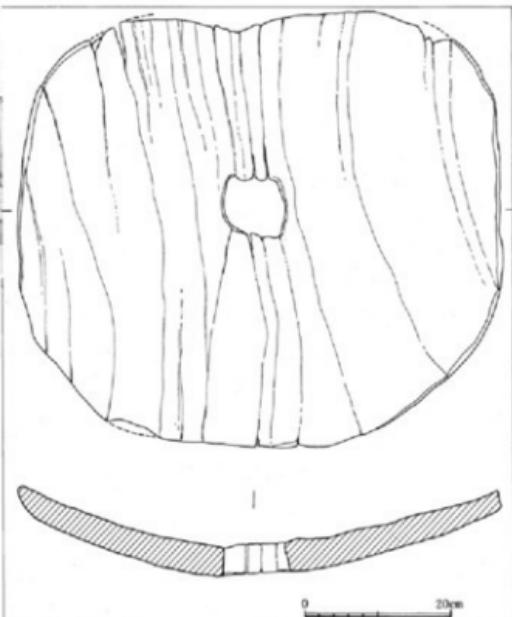
## 土器と石器

30は、深鉢の破片で、口縁の上端に刻目突帯を付している。刻目は、右下がりの向きで正面方向から押圧が加えられており、調整具の原体は木口と思われる。色調は淡褐色で、胎土は粗砂粒が多く含んでいる。

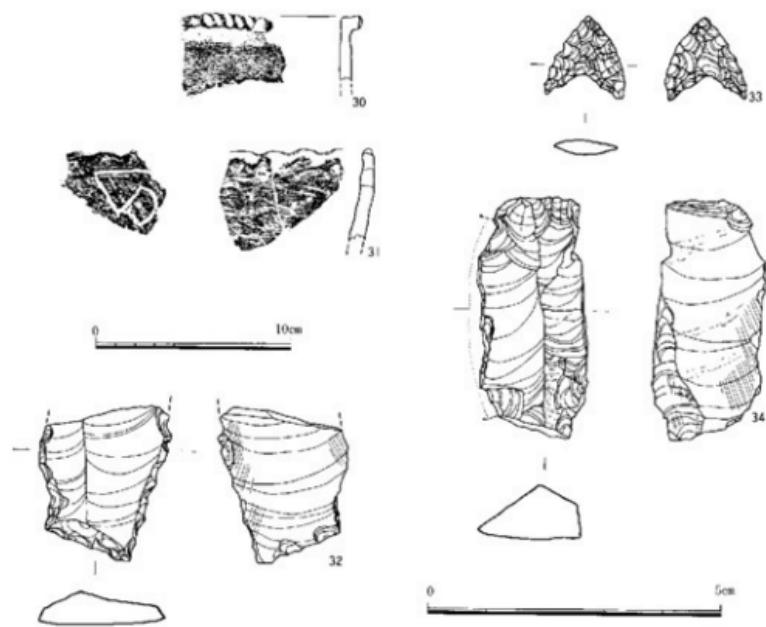
また図示していないが、黒曜石製の剝片が3点出土している。うち1点は、片側の縁が潰れており、使用的痕跡と思われる。



古照遺跡（松山市）出土の建築材をもとに復原された高床建物



3号河川出土のネズミ返し (1/8)



II 区出土の土器と石器 (1/3・1/1)

している。左側の破片には、縁刻の文様がある。右側の破片の方は粗いナメ調整である。内外面とも暗褐色を呈し、外面の一部には煤が付着している。

32は綫長剥片を素材とし、両側邊にプランティングを加える。打面側は欠損している。他の黒曜石片に比べ、表面の風化が著しい。ナイフ形石器と思われる。

33は、無茎式で抉りの入るタイプの石鏃であ

る。表裏面とも細かな調整剝離を加えている。

参考

包含層では、黒曜石製の剥片7点が出土した。34はその中の1点で、黒曜石製の使用痕がある剥片である。肉厚の綫長剥片を素材とし、片側側縁に細かな剝離痕が連続して認められる。

4号河川では黒曜石製の石核と剥片5点が出土している。

## Ⅲ区の調査と出土品

Ⅲ区の調査で明らかとなったのは、3条の河川の跡と性格不明の凹み状の遺構などである。

### 河川

5号河川は、北東方向に流れる幅8mほどの河川である。南北方向と東西方向の二箇所で確認された河川跡を検討して同一の流跡とした。推定線は左図のようになる。5号河川北、南の呼称で表記したが、出土品は、南側に偏っている。5号河川の南側では、流木がかなりの量で混入しており、漆塗の椀も南側の河川中央で見つかった。土器片は、後述する6号河川寄りに集中していた。

### 河川

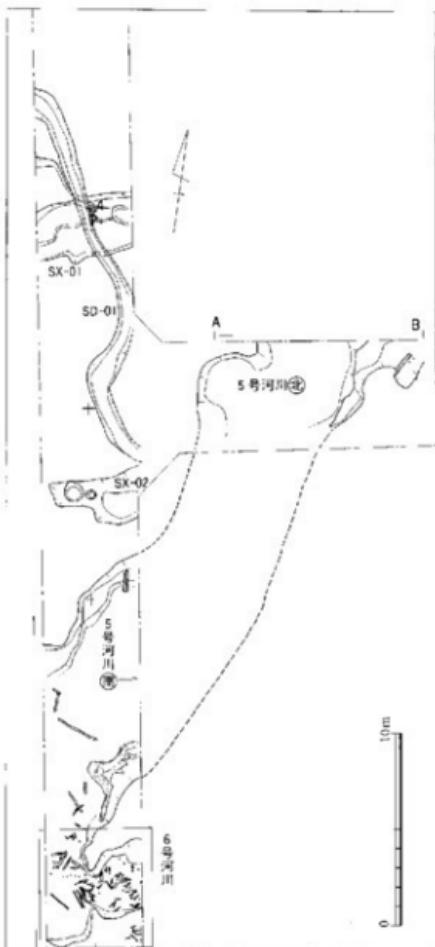
6号河川は、5号河川から派生したと考えられるので、本来同一時期に流れていた可能性がある。ただし土層の状況は、明らかに6号の方が切り込んでいたことから、一応区別して扱うこととした。

6号河川では、下図のような杭列が認められたが、流れを妨げる位置に配されていることから井堰と考えられる。杭の先端は概ね東側に向いている。

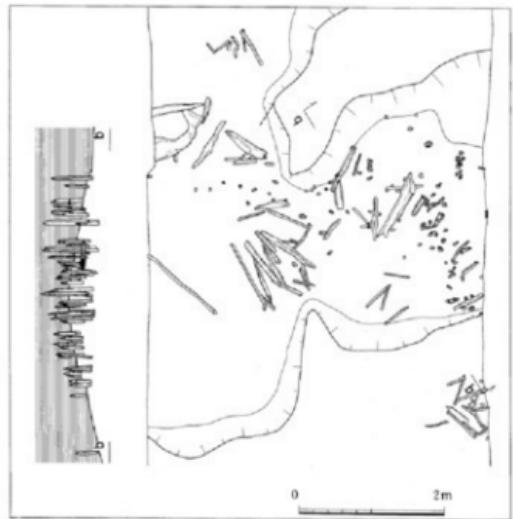
### 遺構

7号河川としたのは、東側に弧を描く一段低くなった部分である。北側の河床は砾と粗砂が多く、南北方向の杭列も見られた。南西側にゆくにつれて、河床は青灰色の粘土層となり、湧水が認められるようになる。流木が残っている

のもこの付近である。出土遺物は縄文土器から土師器までを含んでおり、杭列をはじめ、時期決定が難しい。



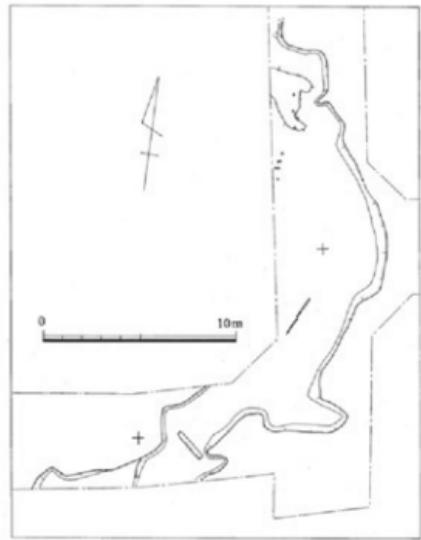
Ⅲ区 河川と遺構 (1/300)



6号河川の杭列 (1/80)



杭列の掘り下げ風景



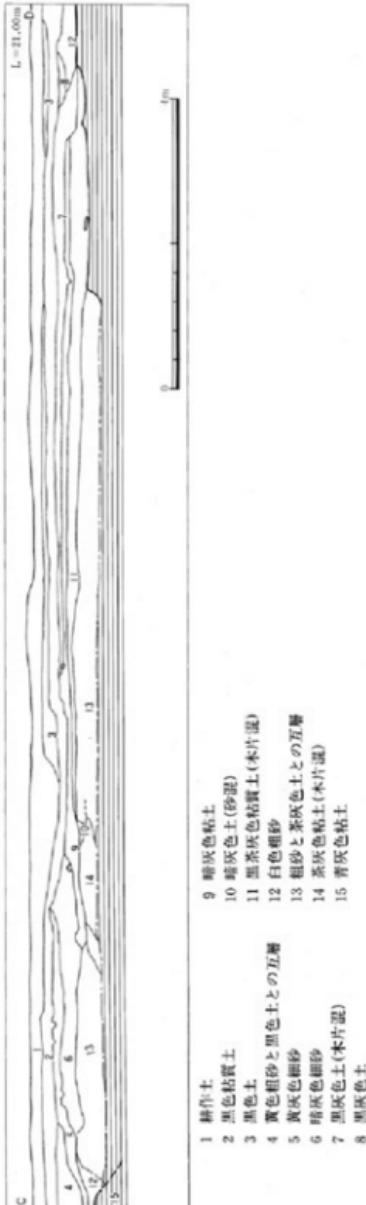
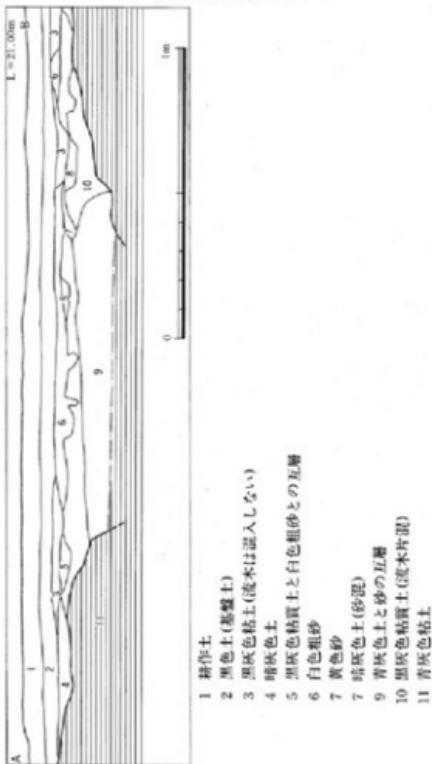
7号河川 (1/300)



7号河川 (南より)



5号河川②(西より)



5号河川の遺物は、南側に集中しており、ほぼ同一時期の突堤文土器に漆塗の木製椀や彩色を施した土器が共伴している点が注目される。漆器の分析や類例については後章をご一読いただくことにして以下に個々の解説を行なう。

#### 土器と木製品

35は、粗製の深鉢で、屈曲する口縁部を持つ。内外面ともに粗いナデ調整を施し、色は黒褐色である。外面に煤が付着し、胴部下半は、二次的加熱によって器面が剥落している全周の5分の1程を残す。

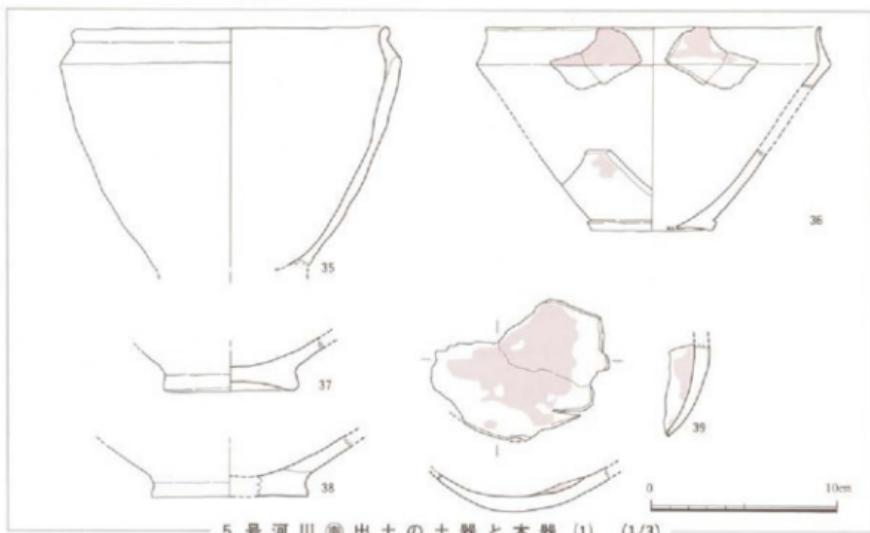
36は、精製の鉢形土器で、深鉢と浅鉢の中間的な形態をしている。小片から全形の復元を行ったので、器高や口縁部径に多少の幅を与える必要がある。口縁の反転部の内外面と、やや底部寄りの胴部外面に柿色の顔料が塗られている。また底部外面にも同様の顔料が付着している。

胎土は石英粒を含み、暗茶灰色、底部内面と口縁部は黒色である。底部と胴部の外面は少し粗い調整で、底部内面から口縁部分は丁寧なナデ調整が施されている。底部の立ち上がり付近は押圧によって画されている。また底部は同時期の資料に比べると大変な薄さである。

37は、浅鉢の底部と思われる。底部径7cmの上げ底で、内面は研磨、外面はナデ、外底部は、調整具による削りが施されている。色調は黒褐色で、胎土のきめは粗い。

38は、浅鉢の底部と思われる。底部径8.3cmで、内面は研磨、外面はナデ調整。色調は、内面が黒褐色で、外面は褐色、胎土には微細な砂粒を含み、きめは細かい。

39は、漆塗の木製容器で図に示すとおり残り具合が良くない。塗膜は剥げ落ちている箇所があるが、肉眼では外面にとくに磨り減った状態



5号河川⑥出土の土器と木器(1) (1/3)

は認められない。また容器の口唇部かと思われる部分が若干残っており、これをもとに復元すると、浅い楕円形の椀、あるいは杓子のお玉といった形状になる。ともかく筆者自身あまり自信がないので、関心のある方は実物をご覧になるようお勧めする。

40は、粗製の深鉢の口縁部である。外面はナデ、内面は条痕が加えられている。色調は外面が黒褐色で、煤が付着し、内面は暗褐色である。胎土に砂粒を多く含み、きめは粗い。

41は甕の口縁から胴部にかけてある。口縁部直下の突帯に右下がりの刻目を施している。外面は条痕、内面は、板ナデ調整である。色調は暗褐色で、外面に煤状の炭化物が付着している。胎土に細砂粒を多く含み、きめは粗い。

42は、甕の口縁から胴部にかけてある口縁部を肥厚させた形で突帯を付し、右下がりの刻目を回らしている。内外面ともにナデ調整を施し、色調は黒褐色で、胎土に細かい雲母粒を多く含んでいる。全周の2分の1程を止めている。

43は、甕の胴部である。口縁部と胴部に刻目突帯を付すタイプと思われる。内面はナデ、外面は板ナデが施されており、外面には煤状の炭化物が付着している。色調は黒褐色で、胎土中に、細砂粒、雲母粒を含んでいる。

44は、甕の口縁から胴部上半にかけてある。口縁端より少し下がった位置と胴の屈曲部に刻目突帯が回る。内外面ともにナデ調整が施され、外面の一部にハケ目痕が残っている。黒褐色を呈し、細砂粒を多く含み、とくに雲母粒が目立つ。

45は、甕の底部と思われる。底径7.5cmをは

かり、内底部に炭化物が付着している。外面はナデ調整が施され、胎土中に石英粒を多く含んでいる。

46は、甕の底部から胴部下半にかけてと思われる。外底部は、やや上げ底で、内底部には炭化物が付着している。外面は、調整具による下から上へのケズリ状の調整がみられる。色調は淡褐色で、胎土には粗砂粒を含む。

47は、甕の底部から胴部下半にかけてである。外底部は、やや上げ底で、内底部には炭化物が付着している。外面は、ナデ調整が施され、色調は暗褐色、胎土に粗砂粒を含む。(以上5号河川)

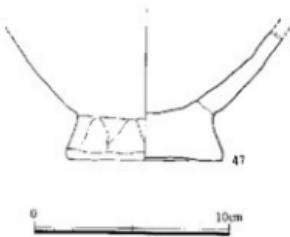
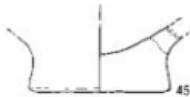
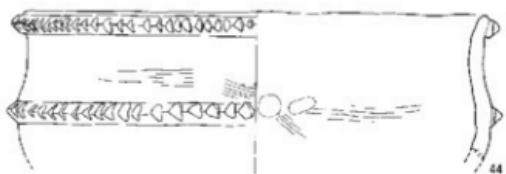
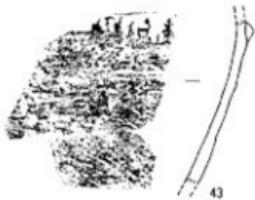
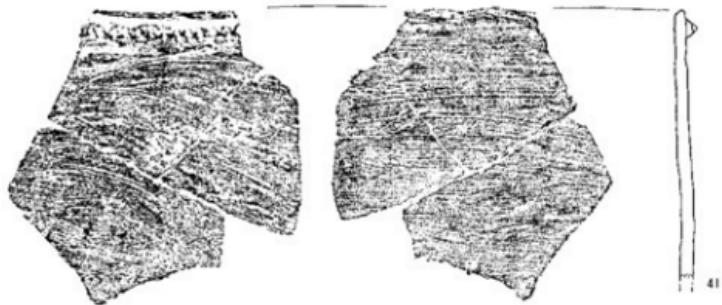
5号河川では、図示した2点(54・55)の他、黒曜石、サヌカイト製の石核・剥片40点が出土した。

54は、サヌカイト製の縦型石趾である。横長の剥片を素材とし、側縁に表裏から二次加工を施し刃部を形成している。

55は、使用痕が認められる黒曜石製の剥片である。片側面は自然面を残し反対側縁のみを使用している。刃部は潰れた状態で、細かな剥離痕が連続して認められる。

#### 器

48は、甕形土器の口縁から胴部にかけてである。土器片は少し歪みがあるため、口径はもう少し大きくなるかもしれない。口縁に接して、やや上向きの突帯を有し、上端部に刻目を回らしている。外面は煤を付しており、内面は、淡褐色を呈する。胎土には細砂粒を少量含み、きめは細かい。内外ともにナデ調整が施されている。



5号河川出土の土器(2) (1/3)

49は、壺形土器の底部と思われる。外底部は極端な上げ状で、内底部には、炭化物が厚く付着している。色調は淡褐色で、白色の砂粒を多く含んでいる。外面はナデ調整である。突帯文土器の時期で捉えられる。(以上 6号河川)



50は、壺形土器の口縁部である。口縁部の直下に突帯を同らし、棒状工具によって刻目を加える。内外ともに条痕が認められる。色調は、内面は黒褐色、外面は淡い赤褐色である。胎土には粗砂粒を多く含み、きめは粗い。

51は、如意状口縁の壺形土器の口縁部である。口唇部に、浅い直方向の刻目を回らす。外面に煤を付し、内面は淡褐色を呈する。胎土には粗砂粒を多く含む。

石器では、図示した2点(56・57)以外に、黒曜石・頁岩・サスカイト製品の石核・剥片が24点出土した。

56は、使用痕の認められる黒曜石製の剥片である。形の整った縦長剥片の鋭い縁辺をそのまま利用したと思われ、細かな刃こぼれが見られる。

57は、黒曜石製の石核で、自然面を半分残している。打面の転移が著しく、打面調整は行わなければならない。剥取られた剥片は、寸ばかりの不定形

剥片であろう。



SX-01では、黒曜石製の石核とサスカイト製の削器が、各1点出土した。削器は、横長剝片の一線辺のみに粗雑な調整を加えて刃部を形成している。

52は、壺形土器の口縁から胸部にかけての破片である。口縁部と同様に突帯を付し、端部に正面からの刻目を回らしている。土器の傾きは、直立に近い可能性がつよい。色調は暗茶褐色で、胎土には粗砂粒を多く含む。

53は、鍬形鐵で、縄文時代の押型文土器に伴うと思われる。肉厚の黒曜石の剥片を素材とし、表裏全面にかなり精緻な剝離調整を施している。周囲からの流れ込みと思われる。

他にサスカイト製削器1点が出土した。

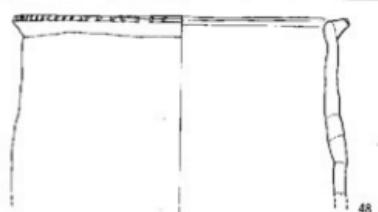


6号河川では、黒曜石製の剥片1点が出土した。

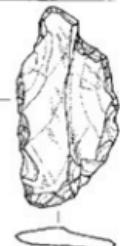
SD-01では、サスカイト製の剥片1点が出土した。

包含層出土の石器として、黒曜石製の剥片4点、サイドブレイド1点、サスカイト製の剥片2点が出土している。





48



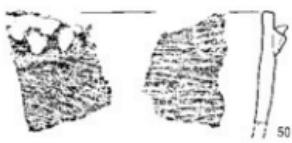
54



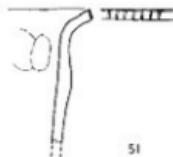
49



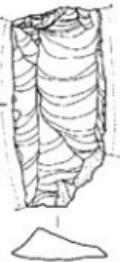
55



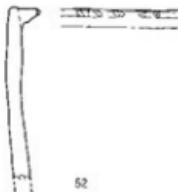
50



51



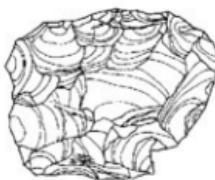
56



52



53



57

0 10cm

III区出土の土器と石器 (3) (1/3・1/2・1/1)

0 5cm

# 彩色された土器と木器

本田 光子  
岡田 文男  
成瀬 正和

四箇遺跡24次調査では、突帯文土器と共に赤く塗られた土器と木器の破片が出土している。木器は内外面とも全面に漆様の厚い塗膜が残っている木胎塗器である。赤色塗彩の鉢形土器の方は、漆様の塗膜が残っているものもあるが、はっきり塗膜が認められないものもある。縄文晩期から弥生時代の出土漆製品については工楽善通氏（注1）、栗山伸司氏（注2）による詳細な集成・論考がある。突帯文土器の時期の木胎

でも言及されている（注3）。その後、種々の自然科学的調査が行われてきた。中でも永嶋正春氏が先駆をつけられた漆塗膜構成の細かい観察調査から（注4）、漆としての確認にいたる技法について多くの情報が得られてきており、資料数の増加によりさらに実りある成果が期待できるようになってきた。（注5）

今回はこれらに用いられる赤色顔料が朱かベンガラなのかを調べ（注6）、木胎塗器についてはその塗膜



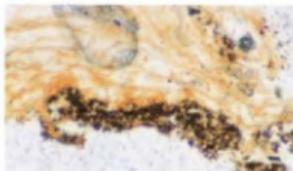
漆膜層構成（四箇24次・約65倍）



木器の塗膜表面（四箇2次・約25倍）



漆膜層構成（比恵25次・約65倍）



木器の塗膜断面（今宿五郎江2次・約130倍）

漆器は佐賀県菜畠遺跡と愛媛県大瀬遺跡で出土しているが、本例はこれにつぐものである。また、本例の土器のように赤色が塗膜として残っていて、赤漆塗りと考えられる鉢形土器は福岡市内でも出土している。

さて、この土器や木器に見られる漆様の塗膜について、実際にはこれを漆であると科学的に同定することは非常に困難なことなのである。出土漆製品の諸問題については小林行雄氏が詳述されており、漆鑑定の難しさあるいは赤色顔料の種類につい

ての層構成についても調べた（注7）。

木胎塗器および赤色塗彩土器の赤色顔料はベンガラのみであり、塗層の断面は（写真左上）に見られる通りである。木胎に近い面から、透明度の高い漆層、炭粉漆層、少量のベンガラ（細粒）と粘土鉱物を混ぜた漆層、ベンガラ（粗粒）漆層、ベンガラ（細粒）漆層、ベンガラ（粗粒）漆層、に塗り重ねられている。内外面でやや異なるが見方によっては七層にも及ぶ部分もある。本例の特徴は、混和剤として粘土鉱物を使

い、ベンガラ漆の粒度を変え細・粗・細・粗と交互に塗り重ねるという点であろう。炭粒はかなり細かく、ベンガラも非常に細かい。かなり丁寧で堅牢性を意識した作りであることが窺えるが、特異というか、今までに公表された出土漆器の層構成には見られないものである。なお、東日本の縄文後期中葉以降のベンガラ漆に認められるパイプ状粒子がわずかに含まれている（注8）。

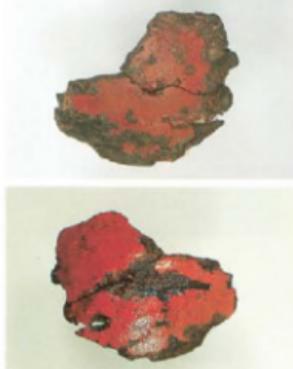
比較のために、市内出土の木胎漆

器以外の赤色塗彩は朱とベンガラが使われているが、土器はすべてベンガラだけである。他の地域では両者が混在している。金子裕之氏は、東北地方では器物の赤色塗彩に使用する赤色顔料として朱とベンガラの取り決めがあり、それ以外の地域ではなかったかその拘束力が弱かったとされている（注13）。

これが漆であり、黒色の下地がないがために劣化の度合が大きくなり、塗膜状に残っていないのだとすると、中期後半以降の朱塗り木器が同じ状態を示すことは、単なる「黒色の下塗りをしない」という技法の問題だ

るようである（注11）（写真同右下）。ただし、この今宿五郎江例は他例に比べると顕著な塗膜は認められないもので、福岡市内では後期に出土する赤色（朱）塗彩の木製品によく見られる状態のものである（注12）。

これが漆であり、黒色の下地がないがために劣化の度合が大きくなり、塗膜状に残っていないのだとすると、中期後半以降の朱塗り木器が同じ状態を示すことは、単なる「黒色の下塗りをしない」という技法の問題だ



木胎漆器



赤彩土器



木胎漆器出土地点

器の塗膜層を見ると、四箇遺跡A地点出土の縄文後期三万田式期の木刀状漆器は黒下地塗りの上に粒度の違う朱を2層に塗っている（写真前頁右上）（注9）。比恵遺跡25次調査出土の二点は炭粉漆・漆・ベンガラ漆である。これらの内一点は長崎県里田原遺跡出土品と同型の脚付杯であるが、それらの漆膜層構成は近似している（注10）（写真同左下）。また、今宿五郎江遺跡2次調査出土棒状木製品は、漆による素地固めを施しただけでその上に直接朱漆を塗ってい

けではなくその必然性を考えなければならない。弥生時代の後半に赤色の漆製品が減少するのも同じ背景の中から生まれたものかもしれない。他地域での調査が望まれる。

次に漆に混ぜた赤色顔料の種類について考えてみよう。縄文時代、弥生時代、古墳時代の漆器に使われている赤色顔料は朱（硫化水銀）とベンガラ（酸化第二鉄）である。ベンガラは縄文時代前期の漆器より用いられているが、朱の使用は後期中葉からである。晩期の東北地方では土

文土器の時期は、今まで肉眼観察により土器にはベンガラが使われていると判断してきたが、今回の結果はそれを裏付けるものである。土器以外の漆器には本例以外に観察調査例がないので今後の調査に待ちたい。

この地域では、縄文時代晩期から弥生時代前期に、赤漆塗の他に丹塗磨研土器、彩文土器というように赤色顔料を用いた土器装飾が混在する。壺は丹塗磨研、あるいは彩文、鉢はベンガラ漆塗りあるいは丹塗磨研、さらに彩文土器はベンガラが主流で

あるが、朱もあり、漆技術との絡みも含めて決して単一ではなく、より複雑な様相をみせている。

四箇遺跡24次調査出土の漆器の赤色顔料と木胎漆器の塗膜層構成は、今までに明かになっている古代の漆関係資料の調査結果に併せて考えると、非常に興味深いものであることがわかった。漆製品の塗膜層構成については今後、調査資料数を増やすだけの価値は充分にあり、特に縄文時代から弥生時代を通じ、時期を追

注5 このような成果を踏まえ、工楽氏は次のように述べておられる。「突帯文土器の時期に到来した新來の漆塗技術がやがて縄文時代からの伝統的漆塗技術に駆逐されていくことについて、両者の漆膜断面の観察や成分の科学分析等により、比較研究を進めていくことでより明らかとなるであろう」前掲書注1

注6 朱かベンガラかを調べるため

諸条件は適宜設定。X線回折装置；宮内庁正倉院事務所設置の理学電機株製文化財測定用X線回折装置、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4mm、ゴニオメーター走査範囲（ $2\theta$ ）；30°～66°その他の



腕輪（捨六町ツイジ遺跡）



腕輪（四箇22次調査）

って資料を蓄積する必要があることを示すものであろう。

注1 工楽善通（1986）「漆工技術」「弥生文化の研究」6

注2 栗山伸司（1989）「弥生時代の漆製品」「横山浩一先生退官記念論文集」I

注3 小林行雄（1962）「古代の技術」

注4 永嶋正春（1985）「縄文時代の漆工技術」国立歴史民俗博物館研究報告6

に顕微鏡観察（本田）と蛍光X線分析、X線回折の測定を行った（成瀬）。X線分析の条件は以下の通りである。蛍光X線分析装置；宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；35kV、印加電流；15mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（ $2\theta$ ）；10°～65°、その他の

諸条件は適宜設定  
注7 漆膜の塗膜層構成を調べるために薄片を作成し（エポキシ系合成樹脂アラルダイトGY1252JP、HY387に包埋した後、断面を研磨）顕微鏡観察を行った（岡田）。

注8 永嶋前掲書（注4）永嶋「北江古田遺跡出土赤色漆塗遺物の塗膜層構成について」

注9 本田（1987）「四箇遺跡出土の木刀状漆器の漆膜について」「四箇遺跡」福岡市理藏

文化財調査報告書172

- 注10 成瀬、本田、岡田(1991)「彩文土器、木胎漆器等の赤色顔料について」『比恵遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書長崎県田平町教育委員会(1988)「黒田原・田平町文化財調査報告書3

注11 本田光子(1991)「赤色顔料について」『今宿五郎江遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書

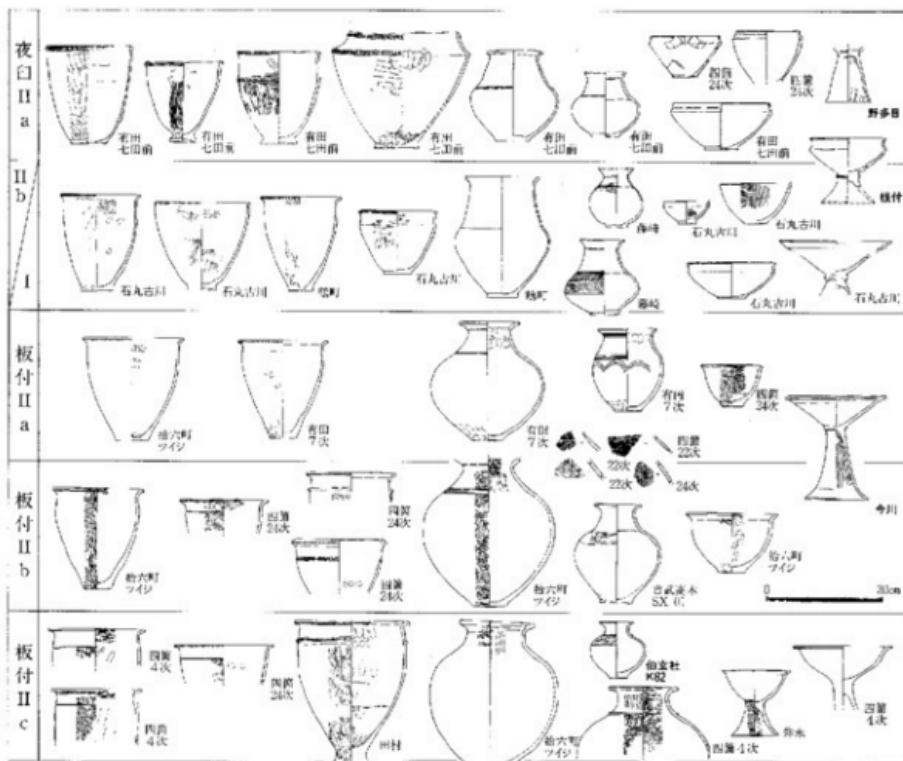
注12 本田光子(1990)「赤色顔料

について「比忠遺跡17、18次」福岡市埋蔵文化財調査報告書 他に羽根戸遺跡出土の鉢形木器も同様である。小林義彦「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告134(1986)

- 注13 金子裕之氏はこの赤色顔料の「規制問題」について、「危岡式の文物の組合せが、全国に分布する塵に欠落するものがあり、その欠落の仕方によって危岡式の分布範囲を区分す

る試みもなされている。この  
顔料の規制問題も、そうした  
項目の一つに付け加えられる  
のではなかろうか」と述べて  
おられる。「特殊な本漆器」  
『月刊文化財』218

(ほんた みつこ／  
福岡市埋蔵文化財センター)  
(おかだ ふみお／  
熊京都市埋蔵文化財研究所)  
(なるせ まきかず／  
宮内庁正倉院事務所)



早良平野における前期弥生土器の変遷 (1/15)

## おわりに

先日、一年ぶりに24次の調査地点を訪ねた。青焼きの図と見比べながら掘削を行なった場所が、きれいに舗装された道路になっているのは、なつかしさの交じったある種の不思議な気分である。建設中の家々をながめながら、かつて人々がそうであったように、地下に埋まっている二千年以上前の出来事も、あと何年か過つと完全に忘れ去られてしまうのかと思った。

しかし住宅の地下1.5mには、まだまだ古代の遺跡が眠っている。少なくとも河川の延長部分は残っている筈だし、集落跡も……これは單なる想像ではなく、十分予測されることだろう。

今回の調査の目玉は、何と言ても彩色のある木製椀と土器片である。一緒に発見された土器は、<sup>ヨウサ</sup>夜臼式とされる弥生前期古段階の型式。

その時期の漆や顔料の使用には、まだ定かでないことが多いという。

今回の調査を始める前、22次調査で漆塗の腕輪を発掘された横山氏から「腕輪の破片がまだ下流にあるかもしれない注意深く掘るよう」に」と言っていたが、その数型式古い段階の土器に伴って漆製品を見つけることができた。旧河川の地下水によって二千数百年も密閉されていたわけで、最近まで水田だったというのも幸いしていたのかもしれない。

さいごに報告書をまとめるにあたっては、同僚諸氏、諸先輩の協力、配慮を得えことを付記して結びとしたい。

井沢洋一・折尾学・菅波正人・杉山富雄・田崎博之・山口謙治・山崎純男・吉武学・力武卓治（敬称略）



24次調査地点から博多湾をのぞむ(1991年春)

## Summary

The Shika (四箇) Ruins are located in the southwest of Sawara (早良) Plain that spreads over westside of Fukuoka City.

We designate one of the area for rescue archaeology during the 1989 campaign "the 24th point of Shika Sites". Some years before, at the neighboring 22nd and 23d point, we found ruins of ancient rivers and remains, for example a japanned wooden bracelet and potteries of Jyoumon and Yayoi period and so on.

As a result of this excavation, we recognized the succession of them, seven ruins of ancient rivers.

According to the shapes of potteries, the age of them are thought to be from the beginning of Yayoi period to the later part of early Yayoi period. And there were some structures, lines of piles that were used for a dam or protection of banks. Now we introduce some of the reliques, wooden fork hoe for agriculture, "Nezumi-gaeshi" a wooden guard from rats, a japanned wooden vessel and red colored pieces of potteries. Above all, red pigment painted on the wooden vessel and potteries has great significance in study on ancient technique and mental culture. This time we got an investigation concerned with analysis of red pigment found in our city.

At the end of this report, we greatly appreciate advices and aids by many persons.

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第261集

四箇遺跡群24次調査 1991年3月15日発行

編集発行：福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課

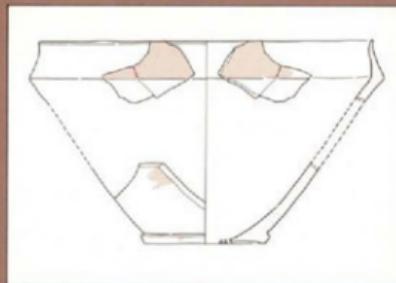
〒810 ☎092-711-4667

印刷所：福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1-10-15

☎451-0027

The general report on the 24 th  
survey of Shika Ruins



1991 Mar.

by

Fukuoka City Board of Education.